平成 28 年度　早稲田大学演劇博物館演劇映像学連携研究拠点　若手研究者海外派遣事業（様式２）

成果報告書

1. 発表者氏名・発表日時・場所

発表者：田中 里奈

発表日時：2016 年 9 月 24 日（土）

発表場所：ヴィーン大学（オーストリア）

2. 研究発表を行った催し全体の概要（発表人数、参加人数、参加国・地域の構成など）

発表者：41 名（参加人数 120 名）

参加国・地域：アメリカ、イギリス、ヴィーン（オーストリア）、スウェーデン、スロベニア、台湾、チェコ、ドイツ、日本、フィリピン、ポーランド、香港（中国）

3. 発表題目・要旨（最終的にペーパーとして発表したもの）

発表題目「ミュージカルというジャンルにおけるポスト・グローバリゼーション？
—ヴィーン発・日本経由で「進化し続ける」ミュージカル—」

発表要旨：

本発表では、1990 年代以降に起こったヴィーンと日本の間でのミュージカルを介した交流を、ポスト・グローバリゼーションの演劇として次の三部構成で示す。(1)ヴィーン・ミュージカルの成立とその目論見、(2)日本版における変更とその逆輸入、そして(3)日墺共同制作の流れである。

1996 年、ヴィーン産ミュージカル『エリーザベト（*Elisabeth*）』（オリジナルはヴィーン劇場協会による 1992 年の制作）の翻案が、日本の演劇制作会社である宝塚歌劇団によって上演された。宝塚版『エリザベート 愛と死の輪舞』ではすべての役柄が女性によって演じられ、かつ娯楽性を特化させたバージョンに潤色された。この宝塚版はセンセーションを巻き起こし、2000 年には東宝株式会社による別の翻案も上演されている。

これら日本版の成功によって、ヴィーン劇場協会は以後、制作するミュージカル作品の自由な翻案を認めることとなった。このような輸出のあり方は、オリジナル版への準拠を徹底させるブロードウェイやウエストエンドには見られなかったものであった。さらに、翻案の一部はヴィーン版に逆輸入までされている。

加えて、ヴィーン－日本間でのミュージカルを通じた交流は、近年新たな方向性を見出しつつある。すでにいくつかのミュージカル作品が、東宝およびヴィーン・ミュージカルの原作者によって制作された。一例を挙げると、『マリー・アントワネット（*Marie Antoinette*）』は、数々のヴィーン・ミュージカルを手掛けたミヒャエル・クンツェ（Michael Kunze）とシルヴェスター・リーヴァイ（Sylvester Levay）によるものである。同作は 2006 年に東京で初演されたのち、2009 年にドイツ版、2014 年に韓国版、2016 年にハンガリー版が続いた。これらの異文化間での共同制作にヴィーン劇場協会は直接的に関わっていないものの、同協会からも公認されている。日本とヴィーンのミュージカル制作における思惑がおそら

く一致し、こうした互恵関係が実現に至ったのである。

ヴィーンから発信された各作品は、これらの交流を通して複数の地域性を獲得すると同時に個々の地域性を薄めていった。「内的であると同時に外的でもあり、さらにそのどちらでもない言語」という矛盾的な両義性は、大きな物語の失敗からはじまったポスト・グローバリゼーションの属性とされている（Sussman & Groves 2012）。パフォーマンス学においても、ポスト植民地主義時代に制作された複文化的な演劇に対して同様の性質を認めている。エリカ・フィッシャー＝リヒテ（Erika Fischer-Lichte）はこれを「上演における諸文化の編みあわせ」として注目を寄せている（Fischer-Lichte 2010）。本発表で挙げた、異文化圏間の交流を通じて「進化し続ける」ミュージカルのあり方は、これらの言説を援用するならば、ポスト・グローバリゼーションの演劇として認めることができるのではないだろうか。

Sussman, H. & Groves, J. (2012) "Introduction: Spills, Countercurrents, Sinks," In: *Impasses of Post-Global.* Open Humanities Press: 11-31.
Fischer-Lichte, E. (2010) "Interweaving Cultures in Performance: Different States of Being In-Between," *New Theatre Quarterly,* 25: 391-401.

4. 質疑応答、参加者との討議の内容

1) 輸入先が宝塚歌劇団だったことと『エリーザベト』の日本での成功の関連性

・最初の輸入先が宝塚だったことは、『エリーザベト』の日本での成功の最も大きな要因だったと言えるだろう。事実、『エリーザベト』以後の VBW 作品は東宝が直接輸入したが、『エリーザベト』以上に大きく翻案されておらず、（それが原因かどうかをここで論じないが）『エリーザベト』以上に成功を収めていない。

2) 『エリーザベト』における地域性と普遍（美学）性

・『エリーザベト』は常に二つの方向性を有しているといえる。つまり、多くの輸入先が共有するテーマ（例えば女性の自立）と、限られた地域でしか有効にならないテーマ（例えばナチズムとの連続性）である。両者の緊張関係こそが、ポスト・グローバリゼーションの性質を有した作品を生み出しているというのが、現段階での私の見解である。

3) 日本での『エリーザベト』の成功と雅子皇太子妃との関係性

・あるとも言えるし、無いとも言える。イギリスを除いて、『エリーザベト』を輸入した国の多くは王（皇）国制だった（または今もそうである）。ゴシップの種として王（皇）室を捉えられるか否かというのは、同作の受容とその成功に影響しているだろう。ただし、観客が雅子皇太子妃と作中におけるエリーザベトとを重ね合わせたかどうかを判断することは難しい。

4) ポスト・グローバリゼーション理論の応用範囲

・今回用いた理論（Sussman & Groves 2012 および Fischer-Lichte 2010）は、基本的に現代演劇およびパフォーマンス作品に応用されており、ミュージカル作品への応用は発表者が知る限り、本発表が初めてである。

5) 「再輸入」に対するヴィーンの反応

・他の地域における翻案の再輸入に対する反応は決して悪いものではなかった。そもそも、日本の独自

翻案自体、ヴィーンからは好奇のまなざしを向けられていた（VBW のドラマトゥルクによる日本版へのコメントを紹介）。

5. 研究発表以外の訪問先・活動内容（該当者のみ、具体的に記入すること）

・ヴィーン劇場協会によるミュージカル『シカネーダ（*Schikaneder*）』（ライムント劇場）の上演調査（9月 23 日夜公演）

6. 今後の課題、成果発表の展望

・今回得た意見およびコメントをもとに、国際演劇学会（IFTR/FIRT）主催の New Scholar's Prize および Helsinki Prize に応募するべく、英語論文を執筆する。

・学際性の高い本学会の特質上、異なる分野の研究者から意見を得たが、とりわけ社会学およびカルチュラル・スタディーズからの反応が大きかった。今後、該当する分野または研究者との共同研究も視野に入れていいだろう。

7. その他、研究発表滞在を通しての感想など

・上にも書いたが、学際性の高さと国際性が極めて高く、若手研究者のみならず中堅の研究者も多く参加していたこともあり、大変多くの刺激を受けた。研究者のみならず活動家やアーティストも参加しており、枠にとらわれない新たな形の学会であると感じた。